

ぽたい!

源流のひとしずく

川上村
巨樹古木珍樹特集 その2

ぽたい

源流のひとしずく

夏
第18号

ぽたい 源流のひとしずく 第18号 発行日 平成21年7月発行
発行所 ■財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 0746・52・0888

CONTENTS

- ・巨樹古木珍樹 調査速報
- ・源流の主役たち
- ・吉野林業の歴史

森と水の源流館

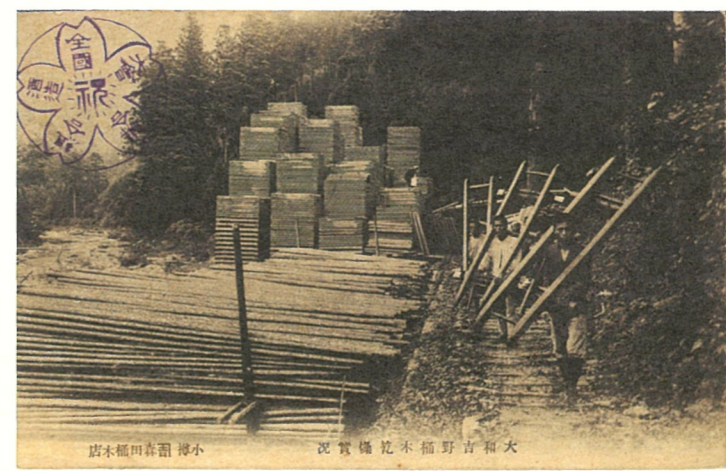
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp



▲筏流し風景（上荷として樽丸が見えます）

吉野地方で本格的な木材生産が始まったのは、室町時代後半頃（16世紀）で、そのころから植林も始まったとされています。吉野川上流域（川上村周辺）では、もともと屋根の板（曾木）や漆器のもとになる木地製品の生産が盛んでしたが、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて、大阪や京都などで大規模な城郭・寺院・都市の建設が行われるようになると、京都や大阪に近い吉野から大量の建築材が運ばれるようになり、吉野の林業が発展しました。さらに江戸時代初期から

吉野林業の歴史



▲樽丸（樽）の乾燥風景（材木を運ぶ馬も見えます）

中期にかけて、吉野川の整備が進められたことにより、より多くの木材が筏に組まれ、吉野川を通じて搬出できるようになりました。そしてこのころから、伐採までの期間が他産地と比べて長くなり始めます。（長伐期）これは、兵庫県の灘や伊丹で酒造業が盛んになり、酒樽の材料の樽丸の需要が増えた結果、樽丸に適した樹齢80〜100年の太い木材を得るために伐採を遅らせるようになったからです。もともと吉野地方では小規模な林業経営者が多かったことと、間伐材や端材も樽丸太・

建具の材料・割箸・蒲鉾板として商品にできたので、多くの苗木を植え（密植）、多く間伐し（多間伐）、最後に残った太い木材を樽丸に加工する林業が確立されました。そして樽丸などの加工品は、吉野川の筏に載せて出荷されました。今では樽丸の生産量は、かつての面影はありませんが、「長伐期」「密植」「多間伐」は現在でも吉野林業の特徴となっています。明治時代に入り、川上村の林業家土倉庄三郎により「吉野林業全書」が刊行されると、吉野林業は全国的な知名度を得るに至りました。大正13年（1924年）には、川上村西河に吉野林業学校が開校し、昭和55年（1980年）に閉校するまで多くの林業家を育てました。



▲吉野林業学校（大正13年開校）

源流人募集!

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金にご協力ください

お寄せいただいた募金は、水源環境向上の一環として、斜面崩壊地での土砂流出防止の木柵設置事業「芽吹き」などに役立てます。

毎年9月の第二日曜日は「水源地の森守募金」の日。「水源地」を守り伝えてゆくための活動を盛上げてゆきましょう。組み立て式の募金箱を配布しています。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

第7回 源流の主要たち



「水源地の森」に関する樹の話

ウバメガシ

横田岳人

(*Quercus phillyraeoides*、ブナ科)

備長炭の材料として有名なウバメガシは、神奈川県以西に広く分布し、庭木の生け垣に用いられることもあり、それほど珍しい植物ではない。備長炭の銘柄で「紀州」として広まっている以上、紀伊半島でもそれほど珍しくないのだが、図鑑類の記述では「沿岸部に産し内陸には多くない」と記されており、沿岸部の植物と解されている。実際に内陸部に位置する奈良県では、天然に生えるウバメガシはそれほど多くない。しかし奈良県にウバメガシが天然で生えていないわけではなく、十津川村や上北山村からウバメガシの報告がある。川上村にもウバメガシの自生地があり、その場所は「水源地の森」である。川上村は三之公地区に原生的自然環境が残された自然林を購入し、保全に努めているが、そのために購入した林内にウバメガシの群落がある。少ないとはいえ吉野郡に自生している樹木であるから、川上村に自生していても、それほど特筆する必要はあるまい。しかし、これまで吉野郡で知られているウバメガシは熊野川水系の上流部であって、紀の川水系の上流部では見つかっていない。海岸線沿いの照葉樹林を代表する種類なので、天然のウバメガシが下流に分布する紀の川水系上流部の照葉樹林にも広く見つかっても良いはずだが、吉野町の妹山樹叢や川上村の丹生川上神社、十二社神社の記録にもウバメガシは出てこない。熊野川水系では大台ヶ原から流れ落ちる北山川最上流の中ノ滝付近(標高 1000m)にも見られるのだから、紀の川水系の上流部で見られない理由を温度湿度に求めるのは正しくない。紀の川水系で見られないのは、その分布の仕方にカギがあるように思われる。



▲ 図1 ウバメガシの花枝と果枝 (上原, 1961)

熊野川水系では、川沿いに上流に向けて点々とウバメガシの分布が広がる。カケス等の動物によって運ばれ分布が広がったと考えられるが、河川沿いや道沿いに人為的に運ばれた可能性もある。いずれにしても長距離の移動ではなく、河川沿いに比較的短い距離を移動し、分布が広がってきたと考えられる。一方、紀ノ川水系のウバメガシは、河口付近の和歌山市から 130km 程度上流の川上村三之公に突然出現する。熊野川水系とは異なり川沿いに上流に向けて分布を広げたと考えるより、稜線を越えてウバメガシが分布してきたと考えた方が良さそうである。三之公地区は尾鷲方面との連絡道になっているし、台高山系の比較的低い標高の稜線で三重県側と隔られている。三重県側の宮川方面からカケス等によってドングリが運ばれ川上村に定着したのだろうか？ウバメガシの遺伝的な性質を解析することで由来は明らかになるだろうが、今のところこの件に関する知見はない。いろんな興味をかき立てる不思議な存在として、語り継いでいきたいものである。

さてこのウバメガシ、若い芽にタンニンを含み、ヌルデの虫こぶの五倍子の代用として既婚女性の歯を黒く染めるのに用いたため、姥女榿と呼ばれるようになった説が有力だが、芽出しの色が茶褐色で姥芽が語源となっているとの説もある。語源に示されるようにタンニンを多く含むのが特徴で、和歌山県ではウ

巨樹古木珍樹調査 調査速報

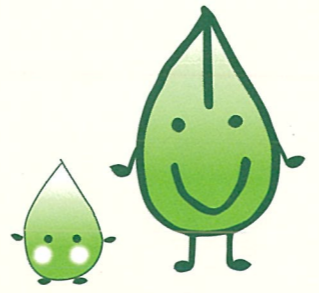
村史などで紹介されている巨樹古木珍樹について、森と水の源流館では再調査を進めています。前回に続いて調査した樹木の速報をお伝えします。
また、村内に巨樹古木珍樹があれば、森と水の源流館へご一報ください。ご協力よろしくお願いたします。

調査対象

- ① 胸高(1.2m)で周囲3m以上のもの
ただし、スギ、ヒノキについては4m以上のもの
- ② シンボルのなもの
- ③ 学術上貴重なもの

調査方法

周囲 胸高(1.2m)の幹周りを測定
樹高 目測



川上村



三重県 松阪市

三重県 大台町





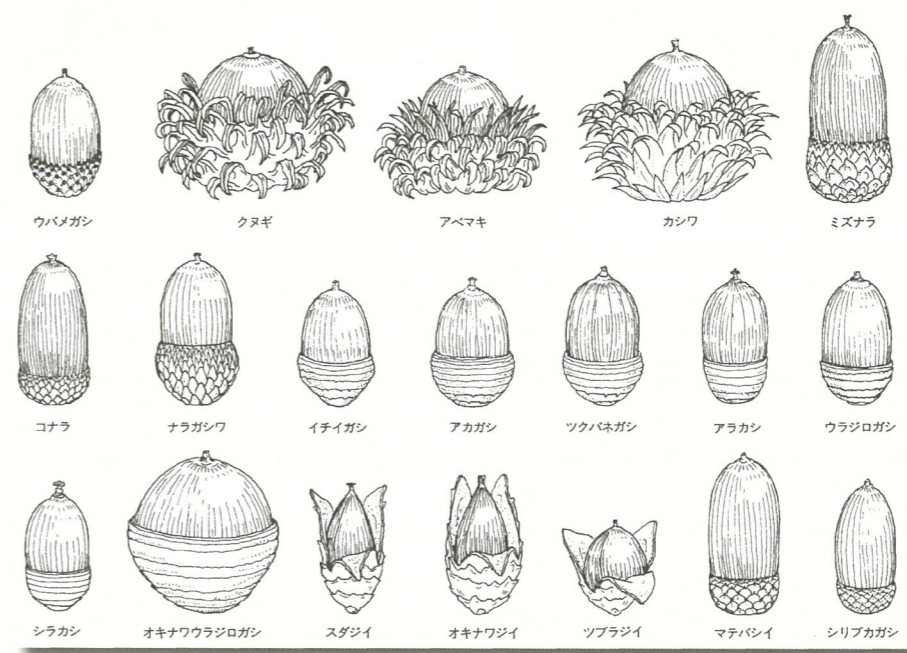
東の川

周樹場 烏川神社
 種所 スギ株立
 囲種 6.85m 樹高45m
 4.50m 樹高45m



県道国栖大滝線、中井口バス停より吉野川を渡り左に曲がって行くと、中井という在所の入口に烏川神社がある。道路より急勾配の石段を少し上ると、石造りの大きな鳥居が立っている。本殿の裏山には樹齢300年を越すスギの巨樹が数本立っている。そのうちの一本は、根本から数m上で二股に分かれている。境内より一目で分かる巨樹である。

周樹場 運川寺
 囲種 タラヨウ
 2.98m 樹高10m



▲ 図2 コナラ属、シイ属およびマテバシイ属の堅果と殻斗 (佐竹他編, 1999)

ウバメガシの葉をお茶の代用として用いたと言われている。上原敬二の樹木大図説(1961)には、果実(ドングリ)が食べられるとあるが、渋くて食べられるとは言い難い。

ウバメガシには植物分類学上の興味深い点もある。ウバメガシは植物分類ではブナ科コナラ属に属する。コナラ属は、いわゆるドングリ状の堅果を付ける植物群で、ユーラシア大陸に広く常緑に分布し、地中海沿岸から中央アジア、ヒマラヤを経て東南アジア、東アジア、日本へ至る分布をしている。幅広い分布をしているため、変異も大きく、コナラ属は大きく二つの亜属に分けられている。全て常緑樹で殻斗が同心円状の模様になっているアカガシ亜属と、ほとんどが落葉樹で殻斗が鱗片状になっているコナラ亜属である。ウバメガシは常緑樹だが殻斗が鱗片状でコナラ亜属に区別されている。日本産のコナラ属植物のうち、常緑の樹種の中でコナラ亜属に分類されるのはウバメガシだけで、ウラジロガシやツクバネガシ、アカガシのように水源地の森で見られる常緑樹は全てアカガシ亜属に属している。ウバメガシだけが特別である。実は、コナラ属は二つの亜属に分けると書いたが、欧米では結実時期(受粉後当年に結実するか、翌年に結実するか)で二つの亜属に分けており、殻斗の形状で分類する日本とは異なっている。これは殻斗が同心円状になるアカガシ亜属は日本を含む東アジア・東南アジアのみに分布するのに対して、殻斗が鱗片状になるコナラ亜属は、ユーラシア大陸に広く分布している。欧米では殻斗形状が鱗片状のみで、日本での分類によるコナラ亜属しかないために、殻斗とは別の基準で分類する必要があったのであろう。欧米の鱗片状の殻斗を持つコナラ亜属の中には常緑のものもあり、日本のウバメガシは欧米系の特徴を持つ樹種なのかもしれない。なお、走査型電子顕微鏡を用いて花粉の表面構造を観察すると、ウバメガシは他のコナラ亜属の植物と比べて特徴的な表面構造をしており、将来的には「ウバメガシ亜属」が独立するかもしれない。

何の変哲もなく珍しくもない「ウバメガシ」だが、植物分類学の位置づけが興味深く、三之公の群落は植物地理学上興味深い群落である。三之公の「水源地の森」だけでなく、ひょっとしたら北俣川流域や三之公川流域にも分布しているかもしれない。詳しく調べてみる必要がある。

<引用文献>
 佐竹義輔・原寛・巨理俊次・富成忠夫(編), 1999.「日本の野生植物木本」, 平凡社.
 上原敬二, 1961. 樹木大図説 1. 有明書房.

烏川神社のすぐ横、小さな谷を挟んで運川寺がある。寺の入り口に植えられている珍しい木がタラヨウである。この木は庭や寺院によく植えられている常緑広葉樹。葉は大きく、表面は光沢がある。葉に文字が書ける、変わった木である。

周樹場 安場天神
 囲種 カゴノキ
 2.40m 樹高12m



樹種 ムクノキ(2本)
 ①周囲 5.13m 樹高2222m
 ②周囲 5.07m 樹高2222m



周樹場 アラカシ
 囲種 3.05m 樹高15.5m



県道国栖大滝線柳瀬バス停より車で5分ほど上っていくと安場という集落がある。車内から一段と高くそびえて見えるムクノキがある。その木を目当てに少し歩くと、安場天神が祭つてある。その真上にカゴノキ1本、ムクノキ2本、アラカシ1本の巨樹が立っている。樹齢や歴史は定かではない。ムクノキは昔天秤棒に使っていたと言われている。カゴノキは巨樹ではないが、珍しい木である。

西の河

周樹場 十二社神社
 囲種 イチヨウ
 4.90m 樹高25m



イチヨウは中国原産の落葉高木で、その実は銀杏として食用にされている。日本には室町時代に渡来したと考えられており、社寺の境内や街路樹として多く植えられている。川上村内には幹回り4mを超えるイチヨウが3本知られているが、西河のイチヨウは村内最大のもので、国道169号線に面した十二社神社の境内にある。ライトアップされた春夏秋冬の姿は通行する人の心を癒している。

周樹場 十二社神社
 囲種 イヌマキ
 2.70m 樹高10m

イヌマキは暖地に自生する常緑針葉樹である。川上村内にイヌマキの自生の大木は見られないことから、十二社神社のイヌマキは植栽されたものと思われる。一般には「マキ」と呼ばれており、川上村では数少ない珍しい大木である。花は5月から6月頃に咲き、秋には実が熟す。実の赤いところを食べると甘い香りが広がる。十二社神社の大イチヨウと並んで立っている。



周樹場 白倉館
 囲種 コウヨウザン
 2.30m 樹高24.5m



原産は中国中南部地方です。土倉庄三郎翁の子龍二郎が台湾から持ち帰ったと伝えられ貴重な珍樹として平成19年村文化財「天然記念」に指定されました。樹高24.5m胸高周226cmで、樹齢約100年(指定時)と推定されます。中国では「杉木」台湾では「福州杉」とも呼ばれているスギ科コウヨウザン属の常

緑高木で、樹皮は日本のスギに似て、葉は鎌形で先が鋭く尖り、球果は卵状球形の大変珍しい樹木です。中国では、建築や家具に多く使われ重要材の一つと言われています。

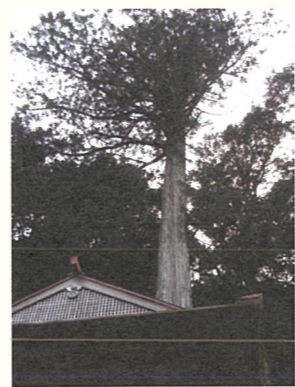
寺尾

場所 十二社神社
樹種 ケヤキ
周囲 4.50m 樹高 30m



ケヤキは川岸や山の中の谷などに生育しているが、寺院や神社の境内にもよく植えられている。川上村には幹周り4m以上のケヤキが数本あるが、寺尾の十二社神社のケヤキは真直ぐに伸び、国道169号線より眺める樹形は見事である。

場所 十二社神社
樹種 スギ
周囲 5.80m 樹高 50m



ケヤキの近くにあるスギの巨樹で、国道169号線よりよく見える場所に立っている本殿の上にそびえる立派なスギの古木である。

高原

場所 十二社神社
樹種 タブノキ
周囲 3.30m 樹高 12m



タブノキは暖地の海岸線に自生する常緑高木であるが、興味深いことに海岸線から遠く離れた川上村に数ヶ所でタブノキの自生が見られる。大滝ダム建設により水没した丹生川上神社上社の旧境内地にも見られた。高原十二社神社のタブノキは井光神社、八幡神社にある木に次ぐ川上村で3番目に大きなタブノキである。

場所 福源寺
樹種 ヤマザクラ
周囲 3.40m 樹高 12m



高原集落の一番高い場所である福源寺の庭にある。ヤマザクラの巨樹では、村で2番目に太いが、残念なことに上部が弱ってきたのが心配である。福源寺の庭には他にエドヒガンが植えられている。またウラジロガシ林が近くにある。

場所 アスカベ尾
樹種 ヒノキアスナロ林
周囲 1.50-2.15m
樹高 30m

※表紙の写真

国道169号線湯盛温泉杉の湯バス停より林道高原洞川線を登っていくと高原集落に至る。集落の途中から下へ、木地ヶ森方面へ下っていくと、高原川にアマゴの釣り場がある。そこから高原川を渡って作業道を車で約10分程度上ると道が分岐している。そこを右方向へさらに5分ほど行くと終点の広場に至る。車を降りて、ヒノキ林の中を約100m下ると、スギ、ヒノキの古木が立っている。樹齢200年くらいで、面積は約0.3haある。その下の部分にヒノキアスナロが35本ほど群生している。周囲2.00m前後であり、樹齢も周囲のスギ、ヒノキから200年ほどと推察される。川上村においては珍しい古木である。何故この場所にあるのかという歴史的なことは定かではない。

井戸

場所 個人所有
樹種 ヤブツバキ
周囲 1.68m 樹高 45m



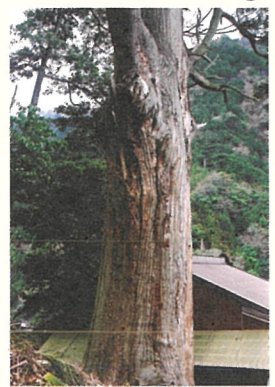
大滝ダムによって付け替えられた国道169号線の武木口バス停から、対岸の山の中腹に見えるのが武木集落である。この武木集落の上手に数本のスギの巨樹によって1段高くみえるのが十二社神社の社叢である。この中で最も大きいスギの近くには青林寺がある。

場所 井光神社
樹種 トチノキ
周囲 4.20m 樹高 26m



国道武木口のバス停より吉野川を渡って右折し、村道を井光川に沿って車で15分余り上ると、井光の集落に入る。集落の入口付近に井光神社がある。神社の裏山に自生のトチノキの巨樹がある。毎年実を多く落とし村人の椀餅づくりに昔から親しまれてきた。

場所 井光神社
樹種 スギ
周囲 5.60m 樹高 33m



井光神社は、古事記に出てくる神武天皇東征の神話から「井光」の名がついたとされる歴史ある神社である。吉野杉は、川上村には広く植樹されているので自生かどうか判断に悩むものが多いが、村内のスギの巨樹は、全て神社にあるものを調査した。井光神社のスギも4番目に大きい巨樹である。本殿の上の社叢にはトチノキ等多くの巨樹がある。

場所 井光神社
樹種 スギとタブノキ



写真のとおり珍樹に類する木である。一見すると面白く感じる。同じ井光神社の社叢にあつて、樹齢は80年くらいと推定される。真直ぐたつているスギの地上6mくらいの所に、タブノキが斜めにまるでスギの幹を貫通しているように見える。若木の時代にスギにタブノキが接触し、成長していく間にスギの幹がタブノキを巻き込んだものと思われる。まさしく自然のなせる造形である。

下多古

場所 宗像神社
樹種 コウヤマキ(3本)
①周囲 2.20m 樹高 30m
②周囲 2.05m 樹高 34m
③周囲 2.04m 樹高 28m



場所 村有林
樹種 スギ・ヒノキ林(歴史の証人)
周囲 5.41m 樹高 55m

国道169号線下多古バス停より、下多古川にそって林道がある。林道をさかのぼっていくと下多古の集落がある。この集落も半世紀前までは小学校もあったが、伊勢湾台風で大きな被害に遭い、その後過疎化が進み、現在では住民のほとんどが高齢者である。集落を通り抜けたあたりに、歴史の証人のある村有林への入口がある。さらに下多古川を渡って上っていくと、鳥居が立っていて、宗像神社と記されている。鳥居をくぐって岩山を少し上ると本殿がある。非常に足場が悪い。本殿の真下が下多古川で、その急斜面の所にコウヤマキの立派な木が数本立っているのを調査した。ちなみに、村の天然記念物に指定されている。林道に出て少し上ると琵琶の滝への入口に至る。

ツバキには何千という品種があるが、自生しているものほとんどがヤブツバキである。ツバキで巨樹と呼ばれる基準は幹周り1.5m以上のものであるが、村内で巨樹の基準をみたしているのはこのツバキ1本のみである。全国的にも珍しい樹である。



武木

場所 十二社神社
樹種 スギ 株立
周囲 8.82m 樹高 45m
①周囲 5.00m 樹高 47.5m
②周囲 4.60m 樹高 46m
③周囲 4.18m 樹高 46m



日本最古の人工林。樹齢250(390)年のスギ・ヒノキ林が今も「歴史の証人」として保存されている。平成17年、村は人工林・水源地の森を含む村有林約1,100haについて、「緑の循環」認証会議(SGEC)の森林認証を取得した。測定値は林内最大のスギのもの。

柏木

場所 公民館
樹種 イチヨウ
周囲 4.22m 樹高 22m



柏木区の現在公民館が建っている平地にあるイチヨウで、西河のイチヨウで、2番目に太い巨樹である。今から約100年余り前には小学校があつた場所でもある。樹齢は不明。樹高のわりに四方に枝が伸びていないのは、かつて近くに保健所が建っていたのと、周囲の民家に葉っぱが飛び散るとのことから数回枝を切り落としたのと、樹形が悪くなった。特徴としては、目元から4mくらいの所から乳柱が垂れている。

※乳柱の写真



今年度から、この講座に参加・修了すると、源流学の森および源流の小屋での活動を森と水の源流館スタッフと協議の上、行うことができます。

参加資格は源流人会会員で、源流学の森での自主的な活動を望まれる方、山小屋に泊まりたい方。宿泊は源流学の森にある手作りの山小屋源流の宿(電気・ガス・水道無し)です。みんなで雑魚寝できる方という事で、募集し開催しました。

1日目は、森と水の源流館で、源流学の森や、そこでの取り組みなどの講義を受けた後、三之公へ。源流の小屋までの水の引き方や、道直しなど、



▲ 二日目のお昼はオープンテラスで



▲ 朝のミヤテ釜



▲ 夕食は鍋を囲んで



▲ 山小屋にはランプですね

ここで「生きる」ために必要な知識を学びました。夜はドラム缶風呂を湧かしましたが、冷たい水を湧かすのに悪戦苦闘しました。しかし、夜空を眺めながらの風呂はとても気持ちよかったです。夕食は各自の持ち寄りでご馳走や、口がなめらかな魔法の水を飲みながら過ごしました。

2日目は、朝から茶がゆを炊いて朝食。その後、源流学の森をぐるりと一周しながら、自然観察をしたりして活動範囲の概要を知りました。お昼ご飯を食べると森と水の源流館へ戻り、修了式を行いました。初めて4人の指導者が誕生しました。来年度も開催予定です。源流学の森でさまざまな活動をしてみたい方、源流の小屋で泊まりたい方、ぜひ、ご参加ください。

5月8日、7月10日 芽吹きの皆づくり

この両日は土砂崩壊を防ぎ、植物の芽吹きを助けるための木柵「芽吹きの皆」を作りました。今年度から、源流人会でも、この「芽吹きの皆」を源流学の森にどんどん作って、崩壊地形での森林の再生を図ろうということで、取り組みを始まりました。



▲ みんなで力を合わせて!



▲ 源流人会で作った芽吹きの皆第1号

辻谷館長の指導の下、今年度は2つの

「皆」を作りました。この材料は三之公の体験の森で間伐した間伐材を使用しています。人工林を元気にすることも兼ねた一石二鳥の作戦でもあるのです。

両日ともよい天候だったのですが、少し暑かったです。お昼からは、源流の美味しいお水で炊いた茶がゆや、参加者それぞれが持ち寄ったご馳走に舌鼓を打ちました。しかし、いつものように茶がゆは作り過ぎたためお腹いっぱい・・・。

お昼からは源流学の森を散策して自然観察。その季節ならではの生き物たちの姿などを観察して楽しみました。

9月25日 道直し

山の道は崩れて当たり前! という事で、道直しをしました。しかし! 前日の下見でスズメバチが源流の小屋の中に巣を作っているのを見見!



▲ ちゃんと道直しもしました

役場に防護服など駆除道具一式を借りて、まずはスズメバチの退治をすることに。

辻谷館長が勇猛果敢に挑みました。防護服を着て、ビニール袋で巣を多い、ナタでつなぎ目からたたき落とします。しかし、防護服を着ていると、そのビニール袋の入り口を結べないことが判明。袋を持って、スタッフの元へ。大あわてで、袋の口をしぼり、事なきを得ました。



▲ 防護服でスズメバチに勝利した辻谷館長

それから、本題の道直しを・・・したのですが、スズメバチの印象が強すぎ・・・

ぽたたい

源流のひとしづく

冬 第19号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 0746・52・0888

CONTENTS

- ・山が病院だった
- ・源流の主役たち
- ・吉野林業の歴史
- ・源流コラム
- ・源流学の森づくり特別編
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・源流人会活動報告

森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL http://www.genryuu.or.jp
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

水源地の森守募金にご協力ください

お寄せいただいた募金は、水源環境向上の一環として、斜面崩壊地での土砂流出防止の木柵設置事業「芽吹きの皆プロジェクト」などに役立ちます。



毎年9月の第二日曜日は「水源地の森守募金」の日。「水源地」を守り伝えてゆくための活動を盛上げてゆきましょう。組み立て式の募金箱を配布しています。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

源流人会募金!

源流人とはかけがえない水を生かす源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆくことのできる会です。

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください



年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163



前回に引き継いで、民間伝承による「民間薬」について、わしが試した経験に基づいて紹介をしたいと思う。今回は、薬とは逆に、毒になる植物も一部紹介することにする。

それでは、まずわしに一番馴染みの深い、昔からある薬で「陀羅尼助（だらにすけ）」という有名な胃腸薬がある。わしらは訳して「陀羅助（だらすけ）」と呼んでいる。古くは江戸時代から作られているような。隣村の天川村では昔から作られており、市販されているが、値段のはる（高い）薬である。葉の袋を見るに効能は（葉草倍）といって16個ほど書いてあるが、胃腸関係の病には、たしかによく効く、わしの常備薬である。わしはこの陀羅助を自分の家で作っている。材料はというと、天然林へ行くと、「キハダ」という名前の木がある。ミカン科の落葉高木で、大きいものは胸高直径40〜50cmぐらいの木もある。葉にする部分は表皮（荒皮）をけずると、形成層の樹皮（あまはだ）が黄色くなっている。「キハダ」という名前がついたそうである。この黄色いあまはだをけずって持って帰り、鍋に入れて1日半ぐらい、とろ火でぐつぐつ煮ると色は黒くなり、ドロドロになる、それを竹の皮に伸ばしておく。冷めると固くなるので、飲む時には適量分だけ、かかして飲む。その時、少しでも口の中に残ると、ものすごく苦いので注意して飲むこと。市販されている

陀羅助は錠剤にしてあるので飲みやすい。山で腹痛をおこすと、「キハダ」の木を探して、皮をはいで、しがんだものである。今でもわしは市販の薬は飲まないことにしている。それと「キハダ」の皮を煮る時には、「アオキ」の葉を4、5枚入れて煮ると、「アオキ」葉のエキスが入っているから薬の色、艶がでる。森と水の源流館の3階にわしが作った「ダラスケ」が展示してあるので見てください。



▲ アオキ

山の谷筋などでよく見かける木で、落葉低木で春一番早く芽をふき、漢方薬によく使われている「ニワトコ」という名の木がある。薬効は神経痛、リュウマチ、打ち身、解熱、利尿等、たくさん記されているが、わしが特に効いたと思っ



▲ ニワトコ

て信じて使っている病気に、特に女の人に多くかかる病、腎盂（じんう）炎にはよく効く。「ニワトコ」の形成層（あまはだ）の部分採取して、しばらく陰干ししたもの「カンゾ」を少し入れて煎じてお茶代わりに1日数回飲む。今まで大勢人に頼まれて作った。他に腎臓病や糖尿病にもよく効く。数年前になるが、わしが民間薬のことでNHKのテレビ取材を受けたことがあり、それが全国放送された。その夜のうちに、2件の電話があり、1件は福島県の中学生の男の子が腎臓病で困っているのを助けてくれとのことであった。さっそく家であった「ニワトコ」の皮を送ってやったことがあり、



▲ アセビ

一度その子の親から御礼の手紙をもらった。良くなり学校へ行っているとのことであった。もう1件は、和歌山県の粉河町の婦人の方からの電話で、腎臓病で苦しんでいる。長い間、病院へ行っているが、治らないのでその薬をほしいとの電話だったので、すぐに送ってやった。数日後、その方のご主人が「ニワトコ」の木の一部を持って家に来られ、よく効いたので、ぜひこの木を鑑定してくださいと出された。間違いなく「ニワトコ」であった。その後、何回となく電話もしてくれ、粉河の美しい桃を送ってくれた。やはり漢方薬と同じで民間薬も、長く続けて飲むことである。

- 観察された生き物（順不同）
- ほ乳類
 - ニホンジカ（足跡）
 - 鳥類
 - ウグイスの巣？
 - カワラヒワ
 - 爬虫類
 - カナヘビ
 - 両生類
 - タゴガエル
 - シユレーゲルアオガエル
 - ツチガエル
 - アマガエル



シユレーゲルアオガエルとヤマアカガエルとサワガニ
里山に住むたくさんの森の生き物に出会いました。

- 昆虫
- マダラバツタ
 - ツマガロオオヨコバイ
 - セスジツユムシ
 - コカマキリ
 - エンマコオロギ

- オオカマキリ
- モリオカメコオロギ（♀）
- ツツレサセコオロギ song
- ツチハンミョウ（有毒）



ツチハンミョウ

さわると皮膚が水ぶくれするなど注意が必要な有毒昆虫。

- センチコガネ
- アリジゴク
- キボシアシナガバチ
- ハラビロカマキリの卵囊
- カマドウマ sp.
- アワフキムシ
- オンブバツタ
- ツチイナゴ
- クルマバツタモドキ
- スズメガタ（幼虫）
- クモ類
- ジヨロウグモ

菌類

- ヒトヨタケ / クロコブタケ
- ニガクリタケ / フミヅキタケ属 sp.
- ムジナタケ / カクラタケ
- スエヒロタケ / スギエダタケ
- ニクウスバタケ（寒くなると出る）

※白色腐朽菌…木材中のリグニンを分解。リグニンが分解された後に残留する、セルロース、ヘミセルロースの色である白色に変色させる。白色腐朽菌は担子菌であり、セルロースとリグニンを同時に分解する非選択的の白色腐朽菌と、セルロースはあまり分解せずリグニンを優先的に分解する選択的の白色腐朽菌に分けられる。

※褐色腐朽菌…木材中のセルロースやヘミセルロースを分解。それらが分解された後に残留するリグニンの色である褐色に変色させる。

種子植物

- コセンドングサ
- ハルノノゲシ
- アキノノゲシ
- ノブドウ
- ベニバナボロギク
- ダンドボロギク
- コウヤボウキ
- ヤマウルシ
- ササクサ（ひつつきむし）
- ツブラジイ（コジイ）
- チヂミザサ
- ミズヒキ
- イノコヅチ（ヘアピン型ひつつきむし）
- ヤブムラサキ
- シヨウジョウバカマ（クローンで増えている）
- ナガバハエドクソウ
- ウバユリ / ミゾソバ
- カラスウリ / テイカカヅラ
- コスモス / コウヤマキ
- ノジスミレ
- アカカタバミ
- マメグンバイナズナ

- コセンドングサ
- イヌタデ
- サクラタデ
- アメリカセンドングサ
- ヒヨドリジョウゴ
- チカラシバ
- オトコエシ
- セイタカアワダチソウ
- シダ植物
- カニクサ
- コケ植物
- コスギゴケ
- ホソバオキナゴケ
- アカイチイゴケ
- ジャゴケ
- その他
- ノブドウミフクレフシ



ホンバオキナゴケ

うす暗い社寺林でもたくさん見ることができます。